

連載

ニワトリの獣医師と呼ばれたくて 14

～一懸命から一生懸命へ～



白田 一敏

バブル絶頂期…

時は平成四年（一九九二年）大晦日。日本はバブル絶頂期。いや正確に言えば、どこかの歯車がすでに狂い始め、急降下するところだったかもしれない。テレビを見ると、一部の若い女性たちが裸同然の格好で踊り狂っていた。当時の若い女性たちは「理想の男性は、三高（高学歴、高収入、高い身長）」といったわがままな希望を声高に口にし、またそれを世間が何となく受け入れる、そんな風潮の時代であった。

人生の分水嶺

年が明けて大学に戻ると、同期生たちの話題も突然就職先のことに変わっている。皆も自分の進路について真剣に考えているようだ。

「進路はどうするの？」
「俺は開業見習にするよ」
「私は大動物臨床がいいな」

を終え、アパートに帰るため名古屋駅から電車に乗り込んだ。いつものこの時間であれば相当混雑するはずであろうが、大晦日のせいかな影はまばらである。ほんやりと車窓から外を眺めると、夕陽は真っ赤に染まり、あと少しで沈もうとしていた。

「あと一年ちよつと！ 来年でやっと学生生活も終わりか。そろそろ就職のことも真剣に考えないとナ…」

アルバイトによる適度な疲労感と年末独特の寂寥感に包まれながら、筆者の脳裏に「進路」という二文字が大きくクロースアップされた。

「公務員も安定しているよな」
「製薬会社は給料が良いらしいよ」
「給料が高いと言えば、JRA（日本中央競馬会）が一番だよ」
「白田は養鶏関係だったよな!？」

と問われて、「うーん。一応そうだけど…」

とハッキリしない返事をしてしまった。煮え切らない返事をしたのは訳があった。

この頃になると、獣医師を募集している各方面の企業あるいは当時就職先として人気のなかった県や市といった地方自治体から諸先輩が来られ、就職説明会と称して自分の職場を直接学生たちにアピールすることもしばしばであった。これもバブルの影響か!?

製薬会社・ワクチンメーカーから先生方に就職斡旋の打診があったとも聞く。この種の打診すなわちコネの強弱は先生方の研究分野、あるいは活躍度合いによる。

当時のわが獣医学科では六割以上の学生が犬猫動物病院と称される小動物臨床の開業を目指していた。それ以外の学生の就職先を大まかに分別すると、①公務員、②農業組合の職員、③民間企業、④博士課程に進学、といった様相である。

全国のどこの獣医科大学でも似たような傾向であった。つまりは企業を希望する学生は少ない。であるから、企業への就職を希望する学生は

企業にとって貴重である。人材の確保が企業の繁栄を左右する事情が肌で感じられる今では、それをさらに実感できる。

当時は終身雇用という概念が主流であったので、女子学生が急速に増えた獣医学科の中で企業就職希望の男子学生はなおさら貴重となる。加えて、就職斡旋の打診を受ける先生方の側から考えても、その先との将来的なつながり、すなわち就職先の確保、共同研究、研究資金等を考えた場合、自分の教え子がどういった先に就職するかは、他人事ではない。

筆者の場合、①動物病院開業希望ではない、②男子学生、③実家が企業の集中する筑波研究学園都市付近、といった条件が都合良く揃っていたため、教授から様々な研究所への就職の打診を受けた。

当初からニワトリの獣医師を志していた筆者であったが、いざ就職を冷静に考え始めると不安なことが次々と思い浮かんだ。

不安点を羅列すると――

◎筆者がイメージするニワトリの獣医師として活躍するにはどこに就職すればよいのだろうか？

◎ニワトリの獣医師を目指すキツカケとなったドクターKが立ち上げた会社の名前(PPQC)は知ってはいたが、詳細を全くわからない。

◎もちろん、PPQCで雇ってもらえるのかも不明。

◎獣医師の仕事は儲かると父に言われて鵜呑みにしていたが、本当のところは？

◎ニワトリの獣医師として養鶏場に直接勤めることになれば、大嫌いなワクチン作業もしなくてはならないのではないか？

◎大学入学当時に世話になった、くだんの社長が都合して下さった資金を今後どう処理すればよいのか？

(父がその社長と仲違いし、すでに退職したことを聞き及んでいたため、社長に連絡を取りづらかった)

◎本当に一生の仕事として良いのだろうか？(獣医師として別の可能性も見え始めていた)

◎シテイボーイとして、東京で働くのもまんざらではない。

――といったものだった。今から振り返ると、非常に世間知らずで単純なものだったが、当時の筆者にとっては重大なことであった。しかし、ウジウジと悩んでいても何も進展し

ない。

「すべてのことは、ドクターKにお会いしてから決めよう。ニワトリの獣医師を志す契機になったのは、先生の話が発端だから……それから進路を決めても遅くない」と決心した。とは言っても、筆者はドクターKの連絡先を知らない。

衝撃の再会!!

手紙を送ってから何日間経過したか定かではないが、いつものように夜遅く帰宅すると、手紙を送った社長からのメッセージが留守番電話に入っている。久しぶりにお聞きするその声は何とも懐かしいものと感じられた。

翌朝早々に電話を入れると、
「オオ、一敏君、元気かい？」
「ハイ……」
久しぶりの会話に思うように言葉が出ない。

「手紙をもらって、早速ドクターKに連絡したよ」
「ありがとうございます」
それから何を話したのかは記憶がない。

「とにかく、農場に来てみたらど

いろいろ思案した末、思い切って社長宛てに一通の手紙を送った。ドクターKと面会できる機会をいただけるようにお願いをしたのだ。
振り返ると、この一通の手紙が筆者にとって人生の分水嶺だったのかもしれない。

う？ ドクターKには君から連絡してみたらいよいよ!!」

「いろいろありがとうございます」と電話を切った。
すぐに社長さんから教えていただいたドクターKの連絡先に電話を入れると、幸運にもドクターKが受話器を取られた。

「久しぶり。元気かい？ 君からの手紙をE社長も喜んでおられたよ」

その声をお聞きするのは、アイザック・アシモフの『ロボットの三原則』に関する話をお聞きして以来だ。
「仕事内容を知りたいのなら、農場巡回に行くと実感できるんじゃないかな!!」
と大変温かい声で筆者からのお願

いを快く受け入れて下さり、農場巡回に行けることになった。
学年末試験がすべて終了した二月下旬、ドクターKと再会する瞬間がやってきた。

緊張。
待ち合せ場所に立ち、ドクターKを待っていたときの筆者の気持ちはこれに集約される。約束の時間通りに来られたドクターKの顔つきは大変温和で、その笑顔にホッとしたことを記憶している。

さて、ドクターKの農場巡回に行きた先は筆者が育った農場であったが、そこへ来るのは五年ぶりとなる。筆者がいた当時とは全く異なる。鶏舎設備やGPセンターが林立し、まさにタマゴ製造工場の様相を呈していた。別世界だ。あまりの変わり様に懐かしさはない。

早速、ドクターKは防護服にマスク・帽子に身を包み鶏舎に入った。慌てて付き従う筆者。

鶏舎に入ると、鶏の様子を鋭い視線ですばやく観察し、実際に鶏を触って状態を確認し、採血を行う。

採血の手法は筆者が大学で教わった方法とは全く異なっていた。大学で教わった方法で採血するには、基

本的に鶏の抑え係と採血係の二名が必要となる。上達して一人で採血するとしても、鶏を横たえ保定する場所がどこかに必要となる。しかし、農場現場では鶏舎構造によりいつも保定場所を確保できるとは限らない。

ドクターKは立ったまま、左手で両翼を軽く押さえながらバランスをとり、鶏を逆さに保定する。この状態で鶏は不思議にじっとしているのだ。わずかな時間でその個体から採血される。この方法は非常に合理的ですばやいものだった。しかもその間、ドクターKは手元を見ない。その場で周囲の鶏の状況を注意深く観察するのである。

「こうして周囲を観察すると、一箇所数十〜二〇〇羽程度の状況がわかる。一二羽採血するから、その間だけでも数百〜三〇〇〇羽程度の鶏の状況が把握できることになるのだよ。現場の情報ですばやく肌で感じるにはこうして見るのが一番だね」とは、周囲を観察しながら教えてくださった、ドクターKの話である。
さらに筆者が驚いたのは、鶏の解剖方法である。ドクターKは、不審な死亡鶏を見つけると現場ですぐに解剖を行う。その際、メスやハサミ

といった解剖道具を一切使わないのだ。手指のみを使い、目にも止まらぬ早さで次々と何羽もの個体の解剖をこなす。まるで神業のような手捌きだ。まさにプロ。

ドクターKの農場巡回時には、同行する農場の責任者たちから様々な質問や相談を受ける。その都度、それぞれの質問や相談に適したアドバイスが下される。巡回が終わると事務所を訪れて経営者と懇談。

話の内容は鶏群状態の説明はもちろんだが、業界の動き、経営方針の

手裏剣やってみないか

帰路、車中でドクターKにさまざままな話をうかがった。よくよく考えてみれば、二人きりで話をするのはこれが初めての機会だった。長い間、筆者にとって身近な存在のように思っていたドクターKは、実は遠い存在であったのだ。

車中での話は研究内容のこと、大學生活のこと、採卵養鶏業界のこと、家族のこと……などあらゆる話題に及んだ。話のすべては思い出せないが最後まで筆者の話を快く聞いてくださり、農場のスタッフになさるよう

相談、スタッフ教育などの養鶏に関係のある話題から全く別次元の話題まで多岐にわたるのだ。なるほどこれがコンサルテーションか!!

まさに、スゴイ……の一言だ。

農場主との懇談が終わる時間は午後九時や十時ということも珍しくない。それから数時間かけてラボに戻る。深夜になるのは日常茶飯事のこと。特にその日は久々にお会いした社長からの歓迎を受けたので、農場を出発したのは午後十時を過ぎていた。

に、建設的なアドバイスをくださった。

そのアドバイスも、決して「PPQCへ来い」といった基調ではなく、筆者がどうあるのが自分にとって最も人生を有意義に生きられるか、といった観点からのものに終始した。

突然、ドクターKは「君は将来いくら給料を取りたいのかね?」と筆者に尋ねられた。

「一〇〇〇万円ぐらいでしようか……」
年収一〇〇〇万円という数字はど

のような金額であるか、当時は全く実感できていない筆者であったが、世間で言われる高学歴、高年収、高身長の高三という言葉が頭をよぎったのだ。

「望みが低いね。最低二〇〇万円を目標にしないとね!!」

と話された後、こう言葉が続いた。

「どんな仕事に就くとしても給料はもらうものではないよ。仕事は自ら創造し、社会に精一杯働きかけた成果で、社会がよくやったね、と与えてくれるものが報酬というものだよ。だから、良くやらない場合には社会はそれだけの評価を下すものだ。不平不満は、給料をもらう、という受け身の姿勢だから出てくるものじゃないかな!!」
と教えてくださっ

た。全く予想外のお答えにスケールの大きさを感ぜ、驚くばかりであった。

話に熱中しているうちに郡山ラボに到着した。当然、真夜中である。

「手裏剣やってみないか」

「ときなり言う、ドクターK。」

「手裏剣?? 忍者が投げる?」

と投げる真似をする筆者。

「そればかりが手裏剣ではないのだよ」

ドクターKは時代劇などで見かける十字型ではなく棒状の手裏剣を取り出した。

「どうやって投げるのですか?」

「手裏剣は投げるとは言わない。」

「打つというんだ」

「右手で打つのなら、右足を前に出して」

と言って、見本としてドクターKは自家製のめがけて手裏剣を打った。

「君も打ってみたら...」

「良いのですか? 外れるとでかい音がしますよ。それに今、真夜中ですよ」

「大丈夫さ」

しばし手裏剣談義に花が咲き、手裏剣に興じたのだった。

決心

数日間ドクターKに同行し、岐阜に戻った。その時にはすでに筆者の気持ちは固まっていた。子供の頃から思い描いていたニワトリの獣医師という漠然としたイメージが具体的なものに変ったのだ。

筆者の予想をはるかに超えるドクターKの人柄、スケール、あるいは仕事ぶりに惚れてしまったことに加えて、他にもいくつか気に入ったことがあった。

企業トップには大企業も中小企業もない。むしろ命がけ、という意味では中小企業のトップの方がトップらしい一面を有する。

俗に「鶏口牛後」という言葉がある。大企業に就職してトップに会う機会が少ないことより、中小企業の方がトップに会う機会が多いだろう。まして、PPQCの話し相手はそれぞれの経営者である。

PPQCで働くことで、それぞれのトップからいろいろ学ぶことができる、と筆者は考えた。命がけで会社を運営している経営者の方々とお会いする機会が多ければ自分自身を

高める機会が多いと思えたわけだ。

二つ目には、フィールドではさまざまな農場で起こる経験を平行してできることだ。仮にどこかの養鶏場に勤めれば他の養鶏場の事例を経験することはない。PPQCが二〇カ所の養鶏場を管理していれば、一年間で人の二〇倍の経験をできることになる。これはすごい。

三つ目には、あちこちを車で飛び回ることができることだ。筆者は車で走ることが大好きなのである

ニワトリ獣医師の誕生

就職が内定した後は卒業までラストスパートだ。日々が飛ぶように過ぎた。秋には山口大学で行われた獣医学会で初めて発表。年末は卒業論文の総仕上げ。年始は卒業論文発表会。終われば国家試験に向けての約一カ月間の勉強。三月初旬には国家試験。そして、卒業式。

卒業証書を授与された時、金銭的に苦しかった大学生活をやっと抜け出せるという安堵感と、やり遂げた

すべてのことが自分の希望のイメージを満たす職場を見つけたこととは極めて幸運なことだった。

ふと、部屋にあった中学一年生の時の文集を見直してみた。テーマは『将来は何になりたいか?』である。もちろん、筆者はニワトリの獣医師になりたいと書いてあった。

この文集に書いた将来の希望を何人の人間が実現できるのだろうか? そう考えると、進路を決定することに迷いは全くなく、むしろ希望に満ちた気持ちで一杯だった。

ドクターKから就職の承諾をいただいた時は心底嬉しかった。

という達成感で満たされた。

ドクターKや養鶏場の社長をはじめ、先生や同期生あるいはアルバイト先の方々からの直接・間接的な支えがあつて、ここに一人のニワトリの獣医師が誕生し、その第一歩を踏み出したことに感謝している。

(実社会編につづく)

(筆者・株)ピーキーキューシー品質管理&生産管理部門長/獣医学博士/獣医師)